

関連項目：指導体制プラン①、②、③

担任だけでなく、職員全員で見守り、声かけ、サポートを行う

目的

本校はへき地校であり、児童数が少ないため、人間関係も固定しがちである。ある学年では児童間の友だち関係が学級経営に大きな影響を及ぼしていた。そこで、学級担任だけでなく、他の職員も一丸となって解決に取り組んでいこうと考えた。

内容

● 情報を全て共有する

4月には、休み時間に、ある児童が周りの児童と一緒に遊ばずに、時折、1人になっている状態が見られた。

そこで、月1回開催している生徒指導委員会で情報の共有化を図った。学級担任は当該児童が業間と昼休みに、「どこで・だれと・何をしていたか」を毎日記録し、報告を行った。また、他の職員も、気付いた言動や様子について報告し合い、今後の対応の方向性について共通理解を図った。学校以外の場合（家庭など）の様子も定期的に知り得たので、児童の変化に早く気付くことができた。

● 居場所づくり

一般的には、友だち関係が困難になってくると、不登校になることがある。不登校になってしまっただけでは、問題解決が難しくなる。そこで、休み時間や昼休みに、児童が気兼ねなく安心していられる居場所をつくることを最優先事項とし、学級担任だけでなく全職員で協力体制をとった。

養護教諭	休み時間に話し相手や相談相手として積極的に関わった。また、他の児童との接点として、さりげない気遣いを行った。児童は、養護教諭に大変信頼を寄せており、心の内を何でも話せるようになった。
図書館指導員	週1回来校する指導員に事情を話し、さりげなく近づいてもらえるように依頼した。仲よくなるにつれて、休み時間のおしゃべりや本の貸し借りが、児童の心の支えとなった。
他の職員	元担任も本校に在籍しており、事情もよく知っているため、積極的にさりげない言葉かけや励ましを行っていた。児童が元担任の教室や他の学年の教室に遊びに行き、休み時間を過ごすこともあった。また、ちょっとした手伝いや役割を児童に頼み、一緒に活動する場面も見られた。

● 学級経営

職員は、一人の児童の対応に偏らないように、学級児童全員にまんべんなく言葉をかけるようにした。また、学級でも、個別のサポートとともに、他の児童への言葉かけやコミュニケーションを積極的に行った。学級では、児童間の会話が少ない状態であったため、担任から話題提示や賞賛、価値付けの言葉かけを意識して行い、会話のできる雰囲気をつくるようにした。特定の児童にだけ心配の言葉かけをするのではなく、どの児童にも普段の生活へのサポートの言葉かけを行うことで、児童の中に「平等感」が生まれ、周りの児童から当該児童への配慮や言葉かけも増えてきている。

成果

年度の初めに様子が気になった児童は、自分の居場所がある安心感から、表情にもしっかりとしたものが見られるようになり、養護教諭に自分が抱えている気持ちを打ち明けるようになった。

クラス全体にも楽しい雰囲気になる場面が見られるようになった。養護教諭が接点となって、児童がお互いに一緒に過ごす時間が増え始めると、周りの児童の言動も変わり、一気に人間関係が好転した。それぞれの児童が、変わるきっかけを求めていたのではないかと感じる。